

(城西人文研究第15巻第2号)

ニーチェにおける夕

——詩人としてのニーチェ——

河 内 信 弘

はじめに

本稿は、ニーチェの生涯をほぼ見通して、夕(Abendrot, Abend)を考えてみようとするものである。同時に『ツァラトゥストラ』における——also, daß der ärmste Fischer noch mit goldenem Ruder rudert! Dies nämlich sah ich einst und wurde der Tränen nicht satt im Zuschauen.——という美しい形象、あるいは、Die Sonne sinkt'の„Siebente Einsamkeit“という表現の理解のためのものでもある。

「第七の孤独」というキリスト教圏外のものにとってはおそらく謎の言葉を知るために、モーセの十戒にからむ石板を受けた「新旧の石板について」から出発し、そのあとでニーチェの生涯の時間の流れにそって、必要と思われる夕のイメージをたどるといふ順序を取ることになる。

一

『ツァラトゥストラ』第三部には、第一部、第二部で説いたことがらを振りかえり、やがてくるツァラトゥストラ三度目の下山の用意とすべきものと知られている章がある。「新旧の石板について」であるが、その(三)の全文を引用することから本稿をはじめたいと思う。

そこは「超人」という言葉を道から捨てあげたところでもあった。そして人間は超えなければならないものであることを。

——人間はかけ橋ではあるけれど、目的ではないことを。その正午と夕のゆえに、新しい日の出をつたえるあげぼのへの道として自分を幸せに讃えなければならないことを。

——大いなる正午というツァラトゥストラの言葉と、そのほかに紫をおびた深い紅いの第二の夕ぐれのごとく、人間の上にかかげたものを、わたしは捨てあげたのであった。

たしかに新しい夜とともに新しい星を見あげるようにもさせた。雲と昼と夜の上に色とりどりの天幕をはるように、笑いをさらにはりわたしもした。

わたしの思いはかることを彼等に教えもした。人間において碎かれて散らばっているものと、謎と、怖ろしい偶然であるものを、一つにして、まとめあげることを。

——詩人として、謎をとく者として、偶然を救いだす者として、わたしは彼等に未来を創造し、そうしながらあつたすべてのものを救いだすことを教えた。

人間における過去を救いだすこと、「そうあった」すべてを造りなおし、ついには意志が「ところでそうわたしが欲したのだった。そうあることをこれからも欲するであろう」と言うようになることを。

——これが彼等に伝えたわたしの言わんとするところの救済である。これこそが救済というものだ。彼等に教えたのである。——

今はわたしの救済をまっている。——わたしが彼等のところへ行く最後の時を。

もう一度人間のところに行きたい。人間のもとに、没落し、死とともにわたしの最も豊かな贈りものをしたい。

太陽からこのことをわたしは学びとった。太陽は沈みゆくとき、あふれんばかりの富を、黄金を、くみつくせない富のなかから海にまき散らしてゆく。——

——こうして もっとも貧しい漁師すら、黄金の擢をこぐ。かつてこれを見て、涙がとまらなかった。——
太陽のようにツァラトゥストラも没落してゆきたいと思う。今、ツァラトゥストラはここにすわっている。砕かれた古い石板と新しい石板——文字は半ば刻みこまれている——にかこまれながら。(KGW. VI, S. 244~245)

新旧の石板は言うまでもなく、旧約聖書の「出エジプト記」における神の言葉を記した二枚の石の板と関連している。

モーセがイスラエルの民を率いてエジプトを脱出して三ヶ月後、神はモーセに十戒からはじまる長い律法を与えらる。モーセは神によって記された律法の石板を持って下山するが、エジプトで染まってしまった偶像崇拜の心から、人々は金の子牛を作り、エホバとして拝していた。偶像崇拜を禁ずるエホバに従うモーセは怒って、神から与えられた石板を山の下に放り投げ、砕いてしまう。これを見たアロンは「吾が主よ怒りを発したもうなかれ、この民の悪なるは汝の知るところなり」という。モーセは再度神の命に従い、石の板を切り、それを持ってシナイ山にのぼり、神

の手によって記された石板を受けとる。

この「出エジプト記」を境にして、旧約聖書の世界は、あるいはイスラエル民族の歴史は大きな変化をとげる。いわゆるモーセの十戒を中心として神との契約が確立し、共同体が成立する。二枚の石板はその契約の成立を象徴する。⁽¹⁾ところでニーチェはそれをどう考えていたのだろうか。『アンティクリスト』の二十五・二十六からそれを見いだしてみよう。(KGW. VI, S. 191~195)

古代ギリシャの流れの中に亀裂を見だし、そこに位置するソクラテスを取りあげたように、ニーチェはイスラエルの歴史の中の転換期にイザヤを見い出す。「自然の価値からすべての自然を剝奪すること」の典型的な歴史としてイスラエルの歴史を見るのだが、それは「歴史を宗教的なものに翻訳することと見ることであった。過去をエホバに対する敬虔さではかることであった。すべての不幸は神への不服従に対する罪となる。すべてはモーセに啓示された神の意志がうとんぜられたことにある。神の意志を取りもどさなければならぬ。そこで神の概念から自然性が、自然の価値から自然性が奪いとられ、生活のすみずみまで定式化され、僧侶を介してそして僧侶が不可欠のものとして秩序づけられてしまった。ということになるか。

ニーチェはイスラエルの歴史を非難しているわけではなく、歴史が宗教的なものに翻訳されていることを、そして翻訳した者達を非難するのである。

そこからおのずとモーセへの啓示、石板が砕かれなければならない意味が示されているよう。

このモーセの時代をさかのぼると、ヤコブ、イサク、アブラハム、いわゆる族長時代となり、それよりさかのぼると聖書は、はやくも創世の時代に入ってゆく。神が数々の預言者を介して人間に語る時代ではなく、神と人間との直接交渉の時代である。そこでは、神と人間という関係で存在はあらわれるけれど、存在が存在そのものとして、絶対的なものに対峙するか、つまれる。しかし、後代のものが、神を持たず、絶対的なものを容認せず、そこに身をお

くと仮定するとしたら、存在が存在としてむきだしにさらされる場というほかはないのではないだろうか。
ところで「新旧の石板」が暗示する旧約の世界から遠ざかり、ニーチェは古代ギリシャにも入っていく。

「超人」を捨いあげたところは、その前の章で示されているのだが、「神々が踊りながらどんな衣であれ身にまとうことを恥るところ」であり、「あらゆる生成が神々の踊りであり、神々の気まぐれと思われるところ」(KGW. S. 243)であった。ここに古代ギリシャが連想される。それはまた旧約の世界とはことなる姿をとろうとも、神々と人間の關係において存在がむきだしのままであり、存在がさらされるところでもあったとでも言うほかない。そこにいかように近づこうとも結局は「比喻で語り、詩人のごとくうまくあらわしえず、どもりどもり言う」(KGW. S. 243)ほかないのではなからうか。

ところで引用文中に「わたいの思いはかるところ mein Dichten und Trachten」という表現があるが、「思いはかるところ」に注意してみたい。

創世紀六章の五、八章二〇において Dichten und Trachten (ルター訳にもとずく現代語訳) の表現を見い出すことができる。「新旧の板について」がモーゼのいわゆる十戒を記す石板と深くかわっているのであるから、いわゆるノアの洪水の前後に出てくるこの表現も当然念頭に入れなければならないものと思われる。

「エホバ人の悪の地に大いになると、その心の思念おもひのすべて図維はかるところのつねにただ悪しきのみなるを見たまえり、ここにおいて……」

Als aber der Herr sah, daß der Menschen Bosheit groß war auf Erden und alles Dichten und Trachten ihres Herzens nur böse war immerdar, da……⁽²⁾

そしてエホバはノアの家族とそれぞれひと番の動物を残し、全てを滅ぼしてしまふ。洪水の後ノアがはじめての燔祭をさげると、エホバは言うのである。

「我ふたたび人のゆえによりて地を誼うことをせじ。そは人の心の^は図^か維るところ das Dichten und Trachten des menschlichen Herzens ^{おさな}幼少き時よりして悪しかればなり」⁽³⁾

これで分るように、Dichten und Trachten は人間の思うところであり、それは神の人間への不信であり、良い意味では使われていない。さきに引用したアロンの言葉と重ね合わせ、アダムとイブを加えれば、人間は根本において是認することの出来ない罪を背負っていることが旧約の世界から浮びでてくるであろう。

「わたしの思いはかること」とはこのようなことをふまえて意図的に「わたしの」とし、聖書における意味を転じて使ったと考えるべきであろう。

ところで『悲劇の誕生』のなかでニーチェはプロメテウス神話をアダムとイブの墮罪神話と対比させていた。⁽⁴⁾ プロメテウス神話とは、ゼウスの人類への憎しみと、プロメテウスの人間への同情、その結果として、プロメテウスが天上の火を盗み、みじめな生活をしている人間に火を与え、ゼウスの激しい怒りにあう、しかし後にゼウスの弱味を握っていたプロメテウスはゼウスと和解し、神々の間で相談役として、予言者とし尊敬される、というものである。

人間が火を自由に支配することは神的自然に対する一種の冒瀆であり、一種の掠奪だとギリシャ人には思われ、人間と神との面倒なときがたい矛盾が文化の門口におかれたとニーチェは考える。侮辱された天上の神々が、人類にくだす苦悩と悲哀を人類は受けとらなければならない。これがプロメテウス神話の骨子であり、そこには、女性的な情念が悪の根源とみる墮罪神話とは違う能動的罪がみられる。「ペスミステイシユな悲劇の倫理的基底は人間の悪の是認とそれによって生れる苦悩の是認として見い出された」(KGW III, 65)。

こうしてみると、どちらにしろ、つまりギリシャにおいて「能動的罪」を見い出そうと、旧約の世界においてキリスト教的罪を見ようと、人間に罪を見ることに変わりはない。そして、それは天にいる神、あるいは天上の神々と人間の関係であるが、神を否定し、神々をも否定し、人間という存在を存在として確立しようとするとき、ニーチェ

は、人間を超えた存在、いわゆる「超人」という言葉を捨てあげた、と言う。それはニーチェが人間の根本に負を見出し、いさざるをえなかったことを意味する。⁽⁵⁾ だからこそ人間の上に超人をかかげざるを得なかった。

ともかくニーチェは残された歴史のぎりぎりのところまで、さかのぼっていき、歴史を理解することによってはその先どうすることもできないところまでゆき、そこで考えている。そして、そこから未来へと思いをはせてゆく。過去を救い出そうとすること、古い石板を砕くこと、神々の気まぐれと思われるところから、超人という言葉捨てあげ、未来にかかげるといふこと、それはそういうことではないであろうか。

それはキリスト教が徹底的に歴史的なものであることの裏返しかもしれない。歴史的なものというのは、歴史的に存在した、あるいは存在するという意味ではない。天地創造からはじまり、イエスに至るまで、すべて歴史によって説明されるということである。「キリスト教徒は全体を洞察している。経験的に観察される歴史を事物の任意の動き、単なる変化とは見ないで、ただ一つの超感覚的な歴史のなかに深く根をおろしたものと見ている」⁽⁶⁾ ということがある。その意味では仏教は徹底的に非歴史的宗教であるといえよう。

結局のところ、ニーチェは、キリスト教に従えば、人間の歴史の始源のところに思いをもどし、そこから未来を見、ツァラトゥストラという今で考えたことになるであろうか。

ツァラトゥストラが自分の得たものを、思うところを伝えようと思ったとき、太陽の行動様式から学んだものの、つまり没落 *Untergang* をする。太陽は人間の歴史を超えたところに存在する自然である。しかしそれはキリスト教的にみれば、人間の存在の場にすぎない自然である。そのように理解されてきた自然に対しての太陽、新しい夜、新しい星であると考えなければならない。

そして、没落にからんで美しい夕日の光景がのべられている。今はそれを指摘するにとどめ、ニーチェの生涯とおしての夕のイメージをたどってみたいと思う。

ニーチェの詩あるいは文章のなかから、夕のイメージを取りだしてみると、多いわけではないが、興味ふかいものを見いだすことができる。

まず十四歳（一八五八年）の詩を取りあげてみよう。

ザーレック

神の祝福をうけた夕べの静けさは

山と谷にただよう。

やさしくほほえみながら太陽は

最後の光をそそいでくれる。

あたりをとりかこむ丘はあかあかと染まり

かがやきと壮麗さのなかでほのめいている

騎士たちが墓から立ちあがり

昔の力をふるうかと思われる

ごらん、城のなかから

楽しげなざわめきが響いてくる。

このうえない喜びのこだまに

あたりの森は耳をすまし、傾ける。

狩りの楽しみが、戦さと

酒のかずかずの歌が、そのなかに混じる。

角笛の音色が澄んで、声高く威嚇する

トランペットが響きわたる。

そして、日が沈む。喜びの響きも

しだいに消え、途絶えていった。

墓場の静けさと怖ろしさが

脅かしながら大広間をつつんでゆく。

ザーレックの城は悲しげに

あの丘の上の荒れはてた岩に横たわる。

その城をみるたびに

心の奥に戦慄がはしってゆく。⁽⁷⁾

夕焼け、廃墟と化した城、この題材を考えれば、この詩にニーチェ個有のものを読む必要はないであろう。誰にも一度は訪れるに違いない感傷といえるであろう。ただ、感傷を感傷として現実のなかで捨ててゆくか、心に深くその慄へが残るかであろう。そこにおいては感傷という言葉であらわしははならないものが潜み、秘かに育っていくことは疑うことはできない。

ニーチェ十九歳、「帰郷 Heimkehr」と題された詩から。五つの詩からなる長いものなのでそのなかからいくつかを選び出すことにしたい。

帰郷

ふたたびわたしは帰ってきた
 疲れたさすらう者のように。

故郷はそっと夕べの歌を

うたってくれる。

.....

心と手と眼よ

樅の木のかおりの下で

金色の夕べのかすかに

ゆれるなかで静かに休め。

ふたたびわたしは帰ってきた。

道に迷った子供、

その子にやさしい故郷は

墓とやすらぎを与えてくれた。

•
•
•
•
•

空の雲、おまえたち帆よ

夕焼のなかに白く

おしよせる潮の上で

上へ上へとふくらんでゆく

わたしの目ざしはじつと

おまえたちの姿にそそがれ

わたしの前のその姿が、永遠に

あたらしい泉がわきあがる

・
・
・
・
・
・

空の雲、おまえたち帆よ

この軽い小舟を運んでいっておくれ、

星あかりの、さすらう者の歩む

おまえたちの道へ。

・
・
・
・
・
・

谷から幽かな

鐘の音がのぼってくる

悲しげに鐘の綱をひくのは

修道士であったか。

修道士はあこがれながら

放浪する者の背を見送っているだろうか

夕日のかげやきをうけて

聖者のようにもえる者を

・
・
・
・
・
・

石の上に腰をおろし

いつまでもわたしは坐り

思い出にみちた

鐘の音を聞きいった⁽⁸⁾

.....

「夕」にかかわるものを取りだしてみたが、ここにニーチェ個有の思想的特徴のあらわれを見ようとするものではない。ただ、ニーチェの心を「夕」がとらえて離さなかったとは考えてよいであろうし、感性的な面ではもはや動かしがたいものができあがっていたのではないかと見ることは可能であろう。「もっとも貧しい漁師すら、黄金の權をこぐ」と「夕日のかがやきをうけて、聖者のようににもえる者」とは同種のものと考えることができる。しかしなんと、いっても思想的、意識的極点は「真昼」に集約されていく。

三

『悲劇の誕生』を中心とするニーチェのいわゆる活動第一期には詩作は極めて少ない。そのなかには「夕」はあらわれてはこない。そこで『われわれの教育施設の将来について』と『反時代的考察』にあらわれた「夕」を選びだしてみようと思う。

前者はバーゼル学士会の主催による五回の連続講演である。ヤコブ・ブルクハルトが「随所においてとても魅力的

であった。……すべてを自分でつかみ、それを人に伝える高い素質を持った人間をひとり得たということは確実である」と評したことのよく知られている講演である。⁽⁹⁾

二人の大学生とショーペンハウアーを思わせる老哲学とその伴れの若者が登場し、プラトンの対話篇を真似ねて話が進行する。教育とは天才の指導下のもとでさらにまた天才を生みださなければならないということであり、その点から現教育というものを見直し、いかにすればよいかを論じている、ということになる。ただいかにすればよいかは結局六回目の講演がなされなかったということにより、あきらかではない。もっともあきらかにしようがないものとも言える。さて天才 *Genie* とは、という問題を意味づけせずに、このやっかいな語を通いすぎることは、たとえ要約であれ許されないかもしれないが、「夕」のイメージをたどるうちに暗示されると思う。

さて「夕」はこの登場人物四人が出会ったとき、その状況を描写するときにあらわれる。

それは、すくなくともわたしたちの風土において、ちょうどこの晩夏しか生みすだすことのできない、そんなすばらしい日のことでした。天も地も静かにおたがいにとつにながれこみ、陽ざしの暖かさ、秋のさわやかさ、かぎりなく澄みきった青空によって、不思議にとけあっていました。(KGW. III, S. 146)

このような日の夕方、四人が出会うわけである。

……わたしたちをつつむ夕方の雲はしだいにあかく染り、夕方はしだいに静かにおだやかになってゆきました。自然が自分のつくりだした芸術作品に満足しながら、完全な一日を、一日の営みをとじてゆく。その規則正しい自然の呼吸を、わたしたちはじっと見つめておりましたときに……(KGW. III, S. 152)

引用すべきものはこれで全てである。文脈から見て、あまり意味を持っているとは思えないかもしれないが、『教育者としてのショーペンハウアー』における「夕」を見ると、単に背景の美的効果をねらった以上に深い意味が潜んでいることが理解できると思う。

むかしの思想家は全力をかたむけて幸福と真理を探した——人が探すものは決して見つからない、それが自然の根本原則なのである。しかし、あらゆるもののなかに嘘偽を探し、自らもとめて不幸をともにする人にとっては幻滅が転じて別の奇蹟が生れるかも知れない。言葉にあらわし難いものが、それによっていわゆる幸福や真理が偶像崇拜の模像品のようにになってしまうのだが、近づいてくる。地球は重力を失い、地上の出来事と権力は夢のようなものとなり、夏の夕べのように輝やかしいものがまわりにひろがってゆく。それを見る者には、自分がようやく眠りから醒めはじめ、漂いながら消えていこうとする夢の雲があたりに戯れているかのようなのである。(KGW. III, S. 37)

——ところでわれわれを引きあげてくれるのは誰であろうか。

それは、もはや動物ではないもの、あの真の人間、哲学者であり芸術家にして聖者である。彼等のあらわれたとき、また彼等のあらわれたことによって、決して飛躍することのない自然がその唯一の飛躍を、喜びの飛躍をするのである。なぜなら自然はようやくそこで目標にたどりついたことを感ずる。つまりそこでは、もう目標を持つ必要もなく、また生と生成の賭けに多くをついやしてしまったものだとして理解するのである。自然はこれを知って明るく輝き、人間が『美』とよぶもの、おだやかな夕の疲れが自然の顔にあらわれる。自然がそのとき明るく輝いた表情で語ることは生存に関する大いなる啓蒙であり、死ななければならない者が望みうる最高の希望は、たえず耳をひらいてこの啓蒙を分かちあう *teilnehmen* ことである。(KGW. III, S. 376)

「夕」がニーチェにとって極めて重要な意味を持っていることが明らかになってきたと思う。

四

ニーチェのいわゆる第二期においてみると、「夕」をめぐるでも、大きな変化をとげている。前節の、つまり第一期の『教育者としてのショーペンハウアー』における自然は「根源的一者」Ureineと言いかえてもよいであろうし、思い切って、天地を創造した「神」といってもよいであろう。その自然はなんといっても人間の外部にある。だから、ニーチェの基本的姿勢は外部から語りかけてくるものに耳をかたむけることにある。⁽¹¹⁾

ニーチェが強度の近眼であったことも関係があるろうが、基本的に耳の人であったのかも知れない。さらに、ヨーロッパの思想が根本的に聞き取るということにあったかも知れないと思う。聖書そのものが全篇にわたって神の言葉を聞き、それを伝える人々の言葉の集大成とすることができるからである。「エホバ、……に言いたまわく」、「エホバ、……に臨みて言う」、これに類する表現はいったい聖書にどれほどでてくるのであろうか。

さてニーチェの第二期において、外部にあたった自然が、ぐっと内部と重なりを持ち、彼に近づいてくる。⁽¹²⁾

それは夕方であった。樅の木の香りが漂ってきた。そのむこうに灰色の山々が見え、頂に雪が輝き、青いおだやかな空がひろがっていた。——わたしたちは、そのようなものがあるがまに見るのではなく、その上にいつも繊細な精神の被膜をかける、——そして、それを見る。祖先から知らず受けつく感覚や、自分自身の気持がこの自然のものによって眼をさます。わたしたちは自分自身のなにかを見るのであり——そのかぎりにおいて世界もまたわれわれ

の表象である。森や山々、たしかにそれはたんなる概念ではなく、われわれの体験と歴史であり、われわれの一部である。(KGW. IV, S. 564)

近づいてくるだけでなく、自然がニーチェの一部と化してくる。この断想が「夕」にかかわることではじめられていることも興味ぶかい。一八七七年のおそらく夏に近くなって記されたものであろう。その頃たしかに眼をかばって主として日沈二時間ぐらい前から散歩していたことが多いと思われるが、⁽¹³⁾それでも前節から、この引用へと移るとき、「夕」は彼の感覚的な意味において重要な、いやニーチェの好きな時間であったとはっきり言ってよいであろう。その好きな時、光景が外から内に転ぜられていく。そして内から外へと、自己を映し出すものとして考えられていく。

自然という鏡のまゝで——ひとりの人間がつぎのように言われたなら、かなり精確に描写されたことになるのではないか。彼は黄色にいろづいた背の高い麦畑を歩くのが好きである。盛りを過ぎて黄色にそまる秋の森や花の色をほかのなによりも好ましく思う。それは自然がいままでなしとげたものよりもっと美しいものを暗示すると思うからである。彼は大きな艶やかな葉の胡桃の木の下にいと肉親のもとにいるようにほっとする。山のなかで小さなぼつりと離れた湖に出会ふのが彼の喜びである。というのは孤独そのものが彼をじっと見つめているように思われるからである。秋や冬の夕方そっと窓辺にしのびより、ビロードのカーテンのように魂のない雑音をつつみこんでしまうぼんやりと明るい霧の灰色の静けさを彼は愛する。加工されていない岩石に太古の、今にも残っている、言葉をもとめる証しを感じ、子供るときから大切に彼は思ってきた。最後に蛇の皮のような動きと、猛獣の美しさを持つ海に彼はなじめず、今もなじめぬままである。——これによってこの人間はたしかに描写された。しかし、自然という鏡は、この同じ人間が牧歌的感傷の故に(「それにもかかわらず」ではなく)かなり愛情のない、けちくさく、自惚れが強い

かも知れないということについては何事も言わない。(KGW. IV, S. 37~49)

グロイター版全集のくわしい報告(IV, S. 262)をたよりに、この章にかかわる断章、あるいは他の章を追っていく⁽¹⁴⁾と、この一文がほぼニーチェ自身をあらわしていると言つてよいと思われる。引用の最後の一文などは自己批判とみてよいのではないか。

こうして人間中心からさらに又、人間を大きなひろがりの中に投入する。「岩石に太古の」と関連する『人間的なあまりに人間的な』(一)の第一章二において、「あらゆる哲学者は、現代の人間から出発し、その分析によつて目標に達すると考える共通の誤りをおかしてしまう」とし、「人間の発展の本質的なものはことごとく太古に、われわれがおよそ知っているあの四千年よりはるか前にあらわれ、この間人間はほとんど変らなかつた」(KGW. IV, S. 21)とニーチェは言う。

『漂泊者とその影』における二九五番のアフォリズムは重要なのであるが、今回は、最初原稿にあったが、後に削られた部分を引用するにとどめたい。⁽¹⁵⁾

一昨日の夕方、クロード・ロラン的な感動にすっかり侵っていたが、とうとう激しく涙がこぼれてきて、長い間とまらなかつた。このようなことをまだ私は体験できたのだ。地上がこのようなものを見せてくれるとは、私は知らなかつた。それはすぐれた画家が作りだしたものとばかり思っていた。その英雄的牧歌的なものを、今、私の魂が発見したのである。そして古代のあらゆる牧歌的なものが、今一挙に、そのベールをとり、開示されたのである。今の今でま、それについて私は何も理解していなかつた。(KGW. IV, S. 468)

アルプスの大自然の夕方を通して、そのなかに身をおくことによって、ニーチェは自然に近づいたと言える。このアルプス、オーバー・エンガディーンと、地中海はひとつにとけあいながら、ツァラトゥストラは生れてくる。

これでいよいよ最初にのべたツァラトゥストラの圏内に近づいてきた。『悦ばしい知識』のアフォリズム三三七、「未来の〈人間性〉を見なければならぬ。アフォリズム三四〇は「死にゆくソクラテス」、三四一は「最大の重し」三四二「悲劇が始まる」である。極めてよく知られ、重要な部分の直前のこの三三七は歴史的感覚を述べている。つまり「人間の歴史全体を自分自身の歴史と感ずることのできる者」がその中心となる。過去の歴史のあらゆる哀しみを自分自身で背負い、耐え、さらに自己の前・後の数千年の歴史を視野に収める人間として、過去の一切の精神的遺産の高貴なものを継承し、責任を負う者として、新たに出発する。そしてそれを運命として引き受ける。

こうしたすべてのものを、人類の最古のもの、最新のもの、損失、希望、獲得、勝利を、自分の心に引き受けること。こうしたすべてのものをついにはひとつの心のうちに持ち、ひとつの感情のなかにつめ込むこと——これは、これまで人間が知ることのなかった幸せを生みだすにちがいない——力と愛にみち、涙と洪笑にあふれた幸せを。その幸せは、夕方の太陽のように、たえまなく汲みつくせない富をふりまき、自ら海にふりそそいでいく。もっとも貧しい漁師でさえ黄金の権をこぐとき、その幸せは自分をもっとも豊かなものと感ずるのである。この神々しい感情をこのときに呼びたい——人間性と。(KGW. V₂, S. 245)

こうして、最初にのべたツァラトゥストラに近づいたことがあきらかになってきた。ニーチェが自己の前後の数千年の視野に入れようとしながら歴史を見ている姿勢が明らかである。(一)で述べた夕方の光景が、特に人類最古の歴史と係わりながら述べられていることも、一層明らかになる。つまり、旧約聖書の世界と古代ギリシャの世界との係

わりである。『悲劇の誕生』を手がかりにギリシャとの係わりを見たが、「死にゆくソクラテス」の章は、そのような意味でも興味深いものがある。再度、しかし前とは別の角度からニーチェのギリシャ観のひとつを見ることにしよう。

ニーチェにおけるソクラテスは非常に複雑な姿を持っているが、ひとつは古代ギリシャの否定者としてのソクラテスがある。古代ギリシャにおける大きな断層があり、そこに位置するソクラテスである。亡びゆくギリシャを背負わされた醜いソクラテスとも言うべきものである。一方そのような歴史から解き放された人間としてソクラテスの姿がある。「死にゆくソクラテス」はそのようなソクラテス像と言えよう。⁽¹⁶⁾

そこでニーチェは「私はソクラテスが行い、語った——またあえて言おうとしなかった一切における勇敢さと知慧に賛嘆する。」と言い、毒杯をあおぎ、足から冷たく硬直し、ついに下腹のところまでそれが進んできたときに、「おお、クリトンよ、私はアスクレピオスに鶏をおそえしなければならぬ」と言ったソクラテスは、実は人生に悩んでいたものであり、その復讐からそう言ったと考えるのである。

ソクラテスが、ソクラテスが人生に悩んでいたのである。そして彼はさらにそれに対して復讐をしたのである——あの隠された、怖ろしい、しかも敬虔で冒瀆した言葉で。ソクラテスでさえ復讐せざるをえなかったのか。彼のあふれんばかりの徳にあって一グラムの雅量が欠けていたのか。ああ友よ。私達はギリシャ人をも越えなければならないのだ。(KGW. V, S. 250)

古代ギリシャにおいて神々と人間の上に君臨する運命は、擬人化されるとき運命の女神となり、復讐の女神ともなる。その報復は死であった。ソクラテスさえも自らの生にむかって自ら報復する。毒杯をあおいで生に死を与えたの

である。ソクラテスの勇敢さと知慧は賛嘆に値いするのにもかかわらず、やはり、存在を存在そのものとしてひきうける地点には立つことが出来なかったとニーチェは考えていたとみてよいのであろう。

こうしてツァラトゥストラの語る本質的なところはキリスト教をさかのぼった地点からも、古代ギリシャ人の立った地点とも離れていることがあきらかになる。言うまでもないのだがツァラトゥストラとはペルシャのゾロアスターその人のことなのである。

五

ここにいたって(一)に戻ることになる。

夕のイメージを十四歳と十九歳の詩と取り除いて、それ以後をたどるとき、しだいに高揚してゆく夕方といえるにちがいない。そして『ツァラトゥストラ』へとニーチェの仕事が結実していく。それは象徴的に真昼に結実してゆくとも言えると思うのだが、その反映としての夕方がこの期にはあらわれていると言つてよいであろう。

「いつも早く訪れて、立ち去ろうとしない夕辺において、自然の表情は残酷であり、死である」(KGW. III, S. 322) この一八三二年の遺された断想に連なるものは『ショーペンハウアー』にあらわれたが、このような夕はその後あらわれることはほとんどなかったといつてよい。

あえて時間的にも前後させたのだが、『悦ばしき知識』の三三六は次のようなものである。

自然の吝嗇——なぜ自然は人間に惜しむのであろうか。その人間の内部の光の充実に応じてあの人間には強く、この人間には弱くというように輝やかせないものであろうか。なぜ太陽のように、偉大な人間が、昇るときに、沈むとき

に美しく見えないのだろうか。そうすれば人間の一生ははっきりするであろうに。(KGW. V₂, S. 244)

夕の美しさは充実の反映なのである。

ところが、ツァラトゥストラ誕生、そして成長のあと、ニーチェの中には充実のあとの夕があらわれる。それはすでに、はやくも『ツァラトゥストラ』のなかにさえあらわれている。

このまえ、わたしはおまえの目に見入った。ああ、生よ。黄金の輝きをおまえの夜の目のなかに見たのだ。——この快楽に心臓がとまった。

——金色の小舟が夜の水面にきらめいた、沈みゆき、水にひたり、ふたたびわたしを誘う金色の揺れる小舟。

.....

おまえはもう疲れたか？ 向うに羊の群と夕焼。羊飼いが笛をふくときに眠るとはすばらしいことではないか？

おまえはそんなにひどく疲れたか、抱いてやろう、腕の力を脱ぐがいい！ のどがかわいているなら——なにかあるかもしれない、だが、おまえは飲もうとしない。(KGW. VI, S. 278~280)

六

『ツァラトゥストラ』が成長し、そして、過ぎ去って行く時、一方は狂気への高揚と、一方は死への深い、疲労に満ちた沈潜があらわれる。

『ツァラトゥストラ』第四部「憂愁の歌」で魔法使いが唱う歌とかなり異同があるけれど、『ディオニュソス頌歌』の冒頭の詩「道化にすぎぬ、詩人にすぎぬ」の最初と最後を引用してみたい。ツァラトゥストラへの高まりの反映と

して夕が、夜へ向う夕と変化していくのがよく分るであろう。

明るさも消えてしまった外で

すでに露の慰めが

地におりてくるときに

姿もなく、音もなく

——あらゆる慰めの優しさのように

慰める露はやわらかい靴をはく——

そのときに熱き心よ、思いだすか、思いだすか、

かつておまえがどれほど渴いていたかを

天上の涙と、そして露の滴に、

喉は疲れきってからからに渴いていたかを

そのあいだ黄ばんだ草の小道に

意地悪な夕方の太陽の目差しが

黒々とした樹々を通りぬけ、おまえのまわりを走りまわっていた

眩惑する太陽の燃える目差しが、いい気味だと。

「真理の求婚者だって——おまえが？」そう太陽の目差しが笑った——

「いいや、詩人にすぎぬ

.....

・ ・ ・ ・ ・
 ・ ・ ・ ・ ・

わたし自身もかつてのこと

わたしの真理の狂気から

わたしの昼への憧れから

昼に疲れ、光に病みながら

——下へ、夕べへ、影へと沈んでいった

ひとつの真実に

身を焼かれ、渴きながら

——まだ憶えているか、憶えているか、熱い心よ

一切の真理から

わたしが追放されていればと思ったものだ

道化にすぎぬ、ただ詩人にすぎぬ (KGW. VI, S. 375~378)

こうしてニーチェの絶唱「日はしずむ」とつらなっていく。ニーチェのかなりの詩は彼の著作とからまりながら作られ、また著作を念頭にしながら読まなければならないが、これは全くその必要がない。詩として完成している。長いが全部引用したい。

日はしずむ

—

おまえの渴きもあともうわずかだ

心よ燃けただれてしまったな。

約束が風のなかに漂っている

見知らぬ人達がわたしに伝えてくれるのさ

——すばらしい涼しがやってくるよ・・・と。

わたしの太陽が、真昼、頭上でじりじりと焼けていた。

きみたちが来るとはうれしいじゃないか

きみたち不意の風が

午後の涼しい霊のきみたちが。

風が変わって、澄んでくる。

夜は横目の

魅惑的流し目で

わたしを誘惑しているのではないのか・・・

しっかりしろよ、わたしの勇敢な心よ

たずねるなよ、「なぜ」と——

二

わたしの生の日よ。

日はしずむ。

はやくも満ち潮は

金色にそまってなめらかだ。

岩はぬくもりを残して息づいている。

あるいは真昼、そのうえで

幸福の神様が昼寝をしていたのだろうか。

みどりの光のなかで

褐色の深淵が幸せをまだ楽しんでいる。

わたしの生の日よ。

夕べは近い。

おまえの眼ははやくも

炎を残しながらも半ば曇り

おまえの涙のはやくも

露はあふれ

はやくも白い海のうえを静かに

おまえの愛の深紅が走っていく

おまえの最後のためらいがちの幸せが・・・

三

晴れやかさ、金色の晴れやかさよ、来るがいい。

死よ、おまえの

このうえない秘めやかな甘味な前ぶれよ。

―わたしは自分の道をあまりに早く駆けぬけてしまったのだろうか。
足が疲れた今ようやく

おまえの目差しがわたしにとどき

おまえの幸せがわたしに追いついてくる。

あたりにただ波と戯れが。

かつて重かったものは

青い忘却のなかにしずみ

わたしの小舟がいまなすこともなく浮んでいる。

嵐と航海――わたしの小舟はそれを忘れてしまった。

夢も希望もおぼれて、しずみ

心と海は波ひとつなく静かだ

第七の孤独。

甘い確かさをこんなに近く

太陽のまなざしをこんなに

暖く感じたことはなかった。

——私の山頂の氷雪はまだ夕日にもえているだろうか。

銀色に、軽々と、いっぴきの魚

わたしの小舟がいままでてゆく…… (KGW. VI 3, S. 393~395)

「わたしの小舟」はどこへ向うのであろうか、と問うたとき、私達はどうか考えたらいのであろうか。

『ツァラトゥストラ』第三部「大いなる憧れ」のなかでニーチェは

——歌うのだ、たぎりたつ歌を、すべての海が静かになり、お前の憧れに耳を傾けるまで——

——静かな憧れの海のうえにあの小舟が、金色の奇蹟のように、浮ぶまで。(KGW VI, S. 276)

と歌ったけれど、そこには「未来の歌の香り」が漂っていた。「日がしずむ」において、静かな海に浮ぶ小舟にその香りの漂いはない。

「新旧の石板」において、歴史をさかのぼり、歴史が誤ったところに立ち、誤りを正すべく、モーセにちなみ石板を砕き、それに代わる超人をひろいあげた。その充実の反映たる「もっとも貧しい漁師すら黄色の櫂をこぐ」夕べも今はない。願望からも希望からも解き放された自由な静謐の夕べである。それは没む前の静謐であり、死の静けさと背中あわせに思えてならない。だが、ニーチェはそれを天地創造に思いをかよわせ「第七日目の孤独」といった。

かく天地およびその衆群ことごとく成りぬ。第七日に神々の造りたる工を竣えたまえり。すなわちその造りたる工を竣えて七日に安息^{やすみ}みたまえり。神七日を祝してこれを神聖^{きよ}めたまえり。それは神その創造^{つく}りなしたる工をことごとく竣えて、その日に安息^{やすみ}みたまいたればなり。

神も休む静けさ。しかしニーチェにとって神はいない。ヨーロッパ二千年を支え、多くの人々が神に自己を投射し、格闘し、神は深められていった。その神はいない。それはニーチェにとっていかようにしても埋めがたき空白であつたかも知れない。ニーチェの努力は、この空白を埋めることにあつたことは、あきらかである。その極点が「永却回帰」であつた。しかし、今、「日はしずむ」にいたつてその願望や希望から解放されている。神すら働きかけを休んでいる世界そのものにニーチェは浸っている。彼にとって意志が全てであつたのだから、このようなものから解放された幸せは「ためらいがち」と言わざるをえなかつたのであろう。

ニーチェという小舟は神なき世界にさまよい出て、あるいは世界そのものに舟出して、世界の静けさに吸いこまれていくように思える。⁽¹⁷⁾

夕は、真昼の太陽の輝きの充実さを示す残照から、「夕あり朝あり」つまり明日を伝える夕から、文字通り夜へ落ちてゆく、静かな夕へと変貌をとげている。

七

ニーチェの妹はいろいろ問題のある人物だが、夕をテーマとした以上、彼女の言葉で本稿を閉じる他ないようだ。狂気のなかに生きるニーチェの心を去来するものがなんであるか知る由もない。幼い頃の夕日をみつめるニーチェに

戻っていたかも知れない。しかし、妹の言葉を引用するにとどめよう。

ヴァイマルをのぞむ美しい光景を、兄はなんと喜んだことであつたろう。その頃、隣りの新しく建てられた家々も、街とそのむこうの山々への展望を邪魔することはなかった。さまざまの雲の姿を浮べ、日のしずんでいく広々とした地平線が兄の最大の喜びであつた。⁽¹⁸⁾

使用テキスト

- Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe, hrsg. von G. Colli und M. Montinari, Walter de Gruyter, 1967~, Berlin/New York (この「使用テキスト」巻数のみを中心記す)
 Sämtliche Werke, Kröners Taschenausgabe Bd. 77, Alfred Kröner, 1964, Stuttgart
 F. Nietzsche Gedichte, P. Reclam, 1964, Stuttgart
 Nietzsche Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe, Bd. 15, Walter de Gruyter, 1980, Berlin/New York (KSA)

参考文献

- Eugen Fink: Nietzsches Philosophie, 3 Auf. W. Kohlhammer, 1960, Stuttgart
 Karl Löwith: Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen, W. Kohlhammer, 1950, Stuttgart
 Karl Jaspers: Nietzsche und Christentum, 3 Auf. R. Piper, 1985 München
 Karl Jaspers: Nietzsche, Einführung in das Verständnis seines Philosophierens 4 Auf. W. de Gruyter, 1974 Berlin/New York
 Elisabeth Förster Nietzsche: Der einsame Nietzsche, A. Kröner, 1922, Leipzig
 Die Bibel oder das ganze Heilige Schrift des alten und neuen Testaments nach der Übersetzung Martin Luthers, Württembergische Bibelanstalt, 1973, Stuttgart

- 『旧新約聖書(文語聖書)』日本聖書協会一九八一年
- 『聖書』関根正雄、木下順治編 筑摩書房 昭和四十一年(世界古典文学全集第五卷)
- 『聖書の起源』山形孝夫著 講談社 昭和五十一年
- 『ギリシヤ悲劇全集I(アイスキュロス篇)』、呉茂一他編、人文書院、昭和三十八年
- 『ギリシヤ・ローマ神話辞典』、高津春繁著 岩波書店 一九七五年
- 『プラトン全集第一巻』田中美知太郎他訳 岩波書店 一九八六年
- 『今はなめらかに風いで、あるニーチェ頌』秋山英夫著、朝日出版、一九八二年
- 『ニーチェ全集』全三〇冊 白水社
- 『ニーチェ全集』信太正三、原佑、吉沢伝三郎共編、理想社
- 『ニーチェ全詩集』秋山英夫、富岡近雄訳 人文書院 昭和四十七年
- 『若きニーチェの識られざる神』小野浩著 三修社、一九七七年
- 『大いなる正午』氷上英廣著 筑摩書房 一九七九年
- 『ニーチェ』(第二部) 西尾幹二著 中央公論社 昭和五十二年

注

- (1) 『聖書の起源』(山形孝夫著)「契約祭儀伝承」参照。六五頁
- (2) Die Bibel. S. 20 筑摩書房によるシュローターバイブルに使われた文語訳。聖書からの引用は以後この訳による。
- (3) ibd. S. 23
- (4) KGW. III, S. 65
- (5) K. Jaspers: Nietzsche und Christentum, S. 45~47
- ヤスパースは「人間にはなにか根本的に出来そこなったところがある」というニーチェの言葉を引きあいに出し、それはキリスト教の原罪という思想を転換させたようなものと指摘している。「ニーチェにとって特徴的なことは、まずキリスト教的刺激に促され、人間の存在を考えるといるところである。それでいながらはじめてからキリスト教の実質的内容である人間と神の関係をすてている。」
- (6) ibd. S. 38~39

- (7) Gedichte (Reclam), S. 8~9
- (8) Sämtliche Werke (Kröner), S. 432~436
- (9) KSA, Bd. 15, S. 39
- (10) 『ニーチェ第二部』西尾幹二著 三三六頁参照。
- (11) たとえばフィリンクによれば、「天才の概念をニーチェは世界の現実性についての自分の直感から導きだし、情熱的に尊敬する人々にその確証を見る」。天才を宇宙の意図を代弁するものとしてニーチェは理解し、天才を宇宙の意図するところ Tendenz に埋めようとする。(E. Fink: Nietzsche's Philosophie, S. 35)
- ヤスパースを次に引用する。これは「夕」を理解するのに実に分りやすい。「風景はニーチェの思想の背景である。この背景を一度でも見た者はそれによって征服されてしまう。この背景が実にさまざまな表現で読者に語りかけ、知らぬ間に読者に侵透するとき、それは一般的に分りやすい言葉になり、その言葉のなかにニーチェの本質的内容——彼の言う高貴、純粹、運命——が隠されているかのである。(Jaspers: Nietzsche, S. 368)
- (12) この第二期のニーチェをフィリンクは次の様に簡明に特徴づけている。
「ニーチェは啓蒙家になる。ニーチェの啓蒙家としての問題設定にとって決定的な意味は、今や人間が明らかに中心となり、あらゆる問が言わば人間に集中するということであり、ニーチェの思索が人間学となるということである。その思索は根本的現実についてのそしてそこから出発して人間の位置についての思索の表現が第一義ではなく、その思索は人間に集中し、そこから、他の存在するものを解釈する。生はもはや形而上学的にも神秘主義的にも、あらゆる現象の背後にある総体的生と解釈されることはない。」(E. Fink: Nietzsche Philosophie, S. 44) 本文次行の引用文は、この簡明な表現でよく理解されるであろう。
- (13) 一八七七年八月二十八日、ローデ宛の手紙に「君に僕のことを話そうか、僕は日が山に入る二時間前に散歩にでている。そしておもに午後と夕方の方の長い影のなかを歩くのだ。」(KSA, Bd. 15, S. 75)。
- (14) 「身内のなかにいるように胡桃の木でほんとうにくつろぐ」(KGW. IV, S. 370)
「夕方、下の方へ、陽の残り火がカスターニエンの艶やかな葉を通りぬけて輝くとき」(ibid, S. 374)
このようにぼつりと断想のなかにある。断想の前後から文意を解く鍵はない。ニーチェの心を打った光景と思われる。
- (15) 『大いなる正午』(氷上英廣著、) 所収「ET IN ARCADIA EGO—ニーチェにおける英雄的・牧歌的风景」および、拙

稿「シリス・マリーアをめぐる」(城西人文研究 第二三号 一九八六年) 参照。

(16) 『若きニーチェの識られざる神』(小野浩著) 五八四頁以下参照。

(17) 「日が沈む」に関しての何人かの見解を記しておこうと思う。

K・レーヴィット「今、その生涯の日が終ろうとする夕方に、ニーチェは——聖書の天地創造の余韻を残し——ツァラトゥストラにとって第七日の夕としてあらわれたものを経験した。それは、最も明るいときに夜がすでに彼を包んだが故に、彼自身にとって不可解のものであった。『私に一体なにが起るのであろうか』という正午に不安に満ち、しばしばくり返される間は、沈みゆく太陽と共に解決し、救済する狂気への移行によって答えられる。『最後の意志』でも『最高の自己省察』でもなく、この狂気だけがニーチェを、ヨーロッパのあるいは人類の運命であることができ、あらねばならないかのとき妄想から解放したのである。』(Nietzsches Philosophie, S. 112)

E・フィンク「ニーチェのディオニュソス讃歌のなかに——欠乏と無力から詩とし開花する言葉の魔法の圏内での、おそらく最も純粹な詩「日が沈む」のなかにタンタロスの苦痛の戦慄が認められる。・・・詩作は、形而上学を拒否するのだがさしあたり世界を思索するにはまだ言葉の乏しい思索にとっては、仮りの救いとなる。』(Nietzsches Philosophie, S. 180)

秋山英夫「ニーチェの表面に幻惑される人は、そのほとんど病理学的な高ぶり、たとえば『アンチクリスト』や『この人を見よ』の激越な調子に押し流されて、彼の深層の志向を見おとす危険があると思う。・・・文筆家としてニーチェはたしかにフォルティシモ(たいへん強く)の作家であることは争えないが、その核心にピアニッシモ(たいへん弱く)を秘めていることは、彼の魅惑の根本をなすのではなからうか。たとえば彼の最晩年の詩『ディオニュソス頌歌』は、「第七の孤独」のうらにある作者の独自であるが、社会的に「鉄石の沈黙」にとりかこまれて、「死のような静かなざわめき」を感じとっている作家の内面の風景が見事に造形されている。たとえばそこに——

あたりには ただ 波と戯れ。

いま私の小舟は なすこともなく休む。

望みも願いも おぼれ沈んで

海と心は 今はなめらかに風^ないである

という、人間の行きつく最高の境地が歌われている。それは『悲劇の誕生』でとりあげられていたギリシヤ人に見られる心の平衡、「アポロ的ギリシヤ人がソーフロシュネー（思慮）と呼んだあの容易に得がたい魂の風なまきのような静けさ」にはかならないのである。（『今はなめらかに風いで』三三三～三三四頁）

(18) E. Förster=Nietzsche: Der einsame Nietzsche, S. 541.